

つぶりと吸って、肌にやわらかく触れるためか、魚類の感覚に近くなった。石までが水のなかで生き生きと存在していた。あらゆるものの境目や隙間が水の膜であいまいになって、すべてのものが水の力のもとでひとつの波のように結びつき揺れていると、妙に安心した。いったい、何に對してホッとしているのかよくわからなかったが、その気配に触れていると、私語する事物たちの声を聞いていよう、奇妙な共生感覚が生じるのだった。朝も昼も夜も、ひとつながりの織物となつて、雨の色に染まり、はじまりもおわりもなく、ただ、水の力に支配されて、共に揺れ動いているのだ。

カビの力が増していた。

あらゆる場所で、さまざまな種類のカビが発生・成長して、繁殖していた。まるで、カビたちの時代の到来だった。

帰り道は、もう、3000回も通った道だった。部屋までの歩数は、晴れた日には573歩、雨の日には586歩、眼を閉じていても歩くことができる。坂道の傾斜の角度は7度、アスファルトの感触まで足の裏が覚えている。風の音によって、耳は、風力を分析した。もちろん、眼は、風景のすべての形、色、その状態まで知っている。うんざりするほどだ。気にすることは何もない。人間機械そのものだ。

6月の闇は深い。しかし、新しいものは何もない。すべてを知っている。角の酒屋の白い壁が雨に濡れて、土そのものの色をとりもどしている。神社の森は黒々として、灯に鳥居の朱が浮かびあがり、いつも、その前を右にカーブするときの気分までが昨日と同じように心に映るので、確実に、あと97歩で団地の階段に足をのせることがわかる。間違いはない。それが生活だ。そして、1日が終るだろう。

鳥居の前をカーブして、13歩目の右足を地面に踏みおろした時、右の頬が微かに痙攣した。眼の底に疼くものがあった。軽い痛みに似たものが頬を走って、頭の芯がやわらかく痺れた。道の右側には、空地に近い公園があるはずだった。足をとめて、小さな公園の方に顔をむけると、深い闇の底から、透明な紙つぶてのようなものが飛んで来て、X氏の右眼に衝突した。光の束だったかも知れない。静かだった。人の気配もない。X氏は、手の甲で右の眼の上下を擦って、誰もいるはずのない公園の闇の奥を覗いた。風に吹かれて揺れている草の気配が漂っているが、ただ、それだけのことだった。馬鹿馬鹿しいと舌打ちをして、2、3歩進みかけて、妙に心が揺れるので、もう一度振り返った。空気の濃度が急に上がって、闇の密度が深くなり、眼には見えないが透明な量子の独楽が無数、廻っているように思えた。そして、そのことが、特別に不思議なことではなく、自然だと感じた。なぜという疑問が生じる暇もなく、草のざわめきの間から立ちのぼってくる力のうねりのようなものに吸い寄せられた。透明な磁力に似たものがX氏を誘った。今まで、6月の草が、X氏の眼の前で、そのように存在したことはなかったし、子供たちがボール蹴りをするくらい